



2025年（令和7年）
3月号（No. 958）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

45年間のヒマラヤでの調査研究・ 教育支援活動を振り返る

秩父宮記念山岳賞受賞者 酒井治孝

一本の映画がきっかけでヒマラヤの虜となった小学校時代。将来の進むべき道を地球科学と決めた高校時代。3年間の青年海外協力隊での活動を経て大学で本格的に取り組んだヒマラヤの地質調査・研究と、ネパールの子どもたちへの教育支援活動——。少年の日の夢から始まった、ヒマラヤでの45年間の回想する。

私のヒマラヤ研究の出発点は、小学3年生のときにクラス担任の先生に引率されて見に行った、イタリヤ隊による1954年のK2（8611m）初登頂の記録映画でした。白銀に輝く峻険で秀麗なヒマラヤの虜になると同時に、難攻不落に見えるヒマラヤの高峰も、入念な準備と科学的トレーニング、強い意志とチームワークがあれば登頂できることにいたく感動しま

した。そして、自分も将来、必ずやヒマラヤの8000m峰に初登頂することを心に誓いました。

しかし、残念ながらヒマラヤの8000m級の処女峰は、64年までに全て初登頂されてしまい、パオニア・ワークとしてのヒマラヤ初登頂の夢は霧散してしまいました。小学校高学年から中学校の理科の授業で、地球の歴史は岩石や地層、化石の中に隠されている

目次

45年間のヒマラヤでの調査研究・ 教育支援活動を振り返る	1
第3回「ナンダ・デヴィ縦走」を開催	5
「偉大なるエベレストの謎」と 日本山岳会との関わり	6
今年の植村直己冒険賞は吉田勝次さんに 国内外での末踏の洞窟探検活動を評価	8
追悼	9
山の名著再読	10
東西南北	12
活動報告 図書委員会	13
図書紹介	14
第79回ウェストン祭のお知らせ	15
会務報告	16
ルーム日誌	16
会員異動	17
INFORMATION	17
新入会員	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室

ことを知り、ヒマラヤ初登頂に代わって、ヒマラヤ山脈形成史の研究に憧れるようになりました。ヒマラヤ研究は巨大な象に蚤（ひら）が取り付いたようなもので、一生かかってもその秘密は解明できないと思うと、一層やりがいを感じるようになりました。

高校時代には将来進むべき道を地球科学と決め、大学では地質学を専攻しました。そして、大学院では、難解な日本列島の土台がどのようにして形成されたのかを解明する研究に取り組みました。博士課程に進学し、室戸岬や都井岬などを対象に研究を進め、成果を学会発表し、博士論文の執筆



タンセン地方で地質調査中の筆者。1981年1月、川の
中州に設営したドゥムレ・キャンプにて

に取り掛かっていました。しかし、このままだと大陸の地質を見ることなく一生、日本列島の研究に埋没するのではないかと危惧していました。そんな気持ちを抱いて、日本青年海外協力隊に応募し、大学院を休学してネパールに行くことになりました。この決断が私の人

生の大きな転換点となりました。

ネパールに派遣され、講師と地質調査の二足の草鞋

80年4月に協力隊から国立トリブバン大学に派遣された私は、理工学部地質学科の講師として3年間勤務しました。1年のうち猛暑期と雨期の半年間は修士課程（日本の学部レベル）の学生に講義と実験・実習指導を行ない、乾期の半年間は国土開発（道路・電源開発や防災）のための地質調査に従事しました。調査対象としたのは、ヒマラヤの中で最も人口密度の高い、10000〜30000m級の山々から成るレッサー・ヒマラヤ地帯でした。河川・沢沿いにコンパスを使って簡易測量しながら、1・5000のルートマップを作成し、そこに地質情報を書き込み、そのデータを総合的に編集して1・6万3360（1^{マイル}を1^{センチ}に縮尺）の地質図を作り、対象地域の地質の成り立ちや地質構造を説明していききました。

1回の調査行は1ヶ月前後でしたが、この間は沢の合流点付近にキャンプを設営し、3〜4日ごとにキャンプを移動しました。調査

をする地質屋は私1人で、コック1人とポーター数名の総勢5人ほどのチームでキャンプを運営していました。食事は毎日変わらず、ダル（豆汁）・バート（ご飯）・タルカリ（野菜煮）で、調査中の行動食としてチャパティ（薄く円型に焼いたパン）を4枚ほど携行しました。煮炊きは大きな石を3つ並べて、薪をくべただけの簡易竈で行ないました。

私は日本でネパール語の研修を受けられなかったので

（大学で教えるので英語研修のみ）、カトマンズ到着後、私的に学校の先生からネパール語を習っていました。そのお陰で、ポーターや村人とは片言のネパール語で話すことができました。結局3年間のうち丸々1年は山での調査生活を送ったことになり、ネパール語は上手くなっていきました。その調査の結果、カリ・ガンダキ河流域のバルバ（タンセン）地方の60×30kmの面積の地質図を完成させることができました。私が命名した地層名と地層の順序・年代は、現在では国際的スタンダードとして使われています。



横臥褶曲したジュラ紀の石灰岩層。○印は馬に乗っている人で、スケールの大きさが分かる。1984年11月、タコーラにて

テレビ番組制作にも協力し、ヒマラヤ誕生の謎を探る

幸いなことに、帰国後40年余りにわたって大学でヒマラヤの研究・調査を継続することができました。また、ヒマラヤやチベットに関するテレビ番組の企画・取材に協力して、10本余りの番組制作のお手伝いことができました。

どの番組も好評でしたが、記憶に鮮明に残っているのは、NHKの「地球大紀行…巨大山脈の誕生」とTV朝日の「チョモランマの渚（なみ）です。実はNHK内部で「巨大山脈ヒマラヤ」の企画が始まったので



エベレスト（左）とヌプツェを背景に調査隊員とポーターたちと一緒に記念撮影。2006年3月、カラバタールにて

すが、文化遺産の「シルクロード」制作と違い、ヒマラヤのどこにどんな被写体があるのか皆目分からず、手探り状態だったのです。そこで地質学者の私に白羽の矢が立ち、85年の春と秋2回、ネパール各地の地質学的に重要な現場を案内して撮影しました。

番組のハイライトは、ヒマラヤ山中でアンモナイトを発見するシーンでした。残念なことに撮影前に雪が降り、山肌は見事に雪で覆われてしまいました。化石発見は難しかったのですが、幸運なことに巨大なアンモナイトを発見することができました。この番組は



エベレストの北面、第1ステップの基部(約8512m)を走るデタッチメント断層(*印。変成帯からチョモランマ石灰岩を引き剥がした断層)を発見。1998年5月

好評を博し、放送後、漫画やビデオも制作・販売されました。

一方、「チョモランマの渚」のタイトルは、拙著『ヒマラヤの渚』(近代文芸社、95年)に由来しています。私は91年から92年にかけて、神奈川県立「生命の星・地球博物館」に展示するための、ヒマラヤの岩石の採取を依頼されました。その岩石は「ヒマラヤ山中の漣(さざなみ)の化石」と「酸素を生み出した藍藻類の化石であるストロマトライト」の壁、各々10m×5mという途方もないものでしたが、そもそもこの2つの岩石は、私が「地球大紀行」の番組で紹介したものでした。このプロジェクトでは、石工が乗ったトラックが谷底に転落するなど大変苦労しましたが、首尾良く採取でき、現在は博物館とその庭に展示されています。その顛末を書いたのが『ヒマラヤの渚』でした。

「チョモランマの渚」の企画では、エベレストに登頂

し、頂上とその下のイエロー・バンドの岩石を採集し、その中から古生代前期の約4・6億年前の化石を発見し、かつてヒマラヤが浅海の渚だったことを視聴者に分かってもらおうという、これまた壮大なプロジェクトでした。

98年春、50日余り取材班とともにチベット側から登山を行ない、登頂した澤田隊員によってサンプルを採取できました。帰国してプレパレートを作成し、首尾良く三葉虫をはじめとする化石を顕微鏡下で発見することができました。さらに山頂の非変成の石灰岩とイエロー・バンドの間に大断層を発見し、イエロー・バンドは400℃余りの熱によって変成し結晶質石灰岩となっており、その熱年代学的研究から2400万年くらい前に上昇を始めたヒマラヤの変成帯は、1440万年前ごろには地表に出ていた可能性を指摘することができました。

人材育成がネパール発展の鍵。優秀だったポーターの子孫たち

私は協力隊の隊員として、開発途上国の中でも特に貧しいネパールに3年間住んで、混沌としたネ

パール社会の中で仕事をするという稀有な体験ができました。その日常生活の中でいつも考えていたのは、「どうしたらこの国が貧しさから脱却し、豊かになれるのだろうか?」ということでした。

何がこの国の財産なのかを考えました。その結果、財産の一つは水資源、もう一つは観光資源、そして、三つ目は人的資源という結論に達しました。世界一の包蔵水力を使つて電源開発や灌漑施設の整備を行ない、世界一高いヒマラヤを観光の目玉として外貨を稼ぐ、そして、国民全員が教育を受け、国の発展を担う人材を育成する。この3つが肝要だと思いました。

これらの中でも人材育成がネパールの発展の鍵を握っていると思い、帰国後は微力ながら次のような教育支援活動を行なってきました。(1)大学を卒業した理工学分野の優秀な学生を日本に留学させて、博士の学位を取得させる。(2)応用・土木地質学分野の研修を日本で受けられるように仲介する。(3)6つの学校校舎を建設し、教育施設(理科実験室、図書室、コンピュータ教室など)の充実を図る。(4)優秀な成績を取めた学生と、意欲はあ

るが貧しい家庭の学生に奨学金を贈る、などです。

これまで10人以上の学生が工学・理学・農学博士の学位を得てネパールに帰国し、活躍しています。また、地質学科の大学生が、冬休み中の生徒のいない校舎に2週間ほど寝泊まりし、地質学野外実習を継続してやっています。これまでに建設した2つの校舎を利用して、3000人以上の学生がこの実習を受けました。また、2015年の大地震によって倒壊した、標高2800mにあるジュンベン中学校を再建しました。

最後に、私のささやかな教育支援によって大きく成長した、ポー



2015年の大地震後、仮校舎の前に集まった生徒たちと先生。前列で首にハタクを巻くのが筆者。2016年11月、ジュンベン村にて

ターのインドラ・バードルとその子どもや孫の話を紹介しましょう。彼は生まれてこの方、靴やサンダルを履いたことがなく、いつも裸足で荷物を担いで歩いていました。足の裏は厚く硬くなってヒビ割れていました。寒い冬でも短パンとシャツだけで、夜テントの中で寝るときは麻袋を被って寝ていました。性格は明るく、知らない人でも誰にでも声を掛け、ロキシ（ネパールの焼酎）を飲むと上機嫌で歌を唸っていました。

自分の名前だけはネパール語で書けますが、それ以外は読み書きができませんでした。猫の額ほどの土地でトウモロコシや麦、野菜



タンセン地方ドゥムレ村に建設中の校舎の屋根にコンクリートを流す作業は、雨期に村人総出で行なわれた。2000年6月

を作っていました。それだけではとても家族を養えず、ポーターや道路工事の人夫、粉挽きなどの仕事をやっていました。

しかし、息子と娘は学校に行かせていました。7年生になる息子ゴパールが私のキャンプを訪ねてきたときには、英語で書かれた私の地形図が読めるのに驚きました。そこで私は、「10年生の学校を卒業し、卒業資格試験に合格したら大学に行きなさい。私が奨学金を出してやるから」と言いました。

それから4年後、日本の私に彼から手紙が届きました。その中には「卒業資格試験に合格し、現在ボカラの大学で勉強しています。ご存じのとおり我が家は貧しいので、奨学金を出してくれませんか」と書かれていました。そこで毎年、奨学金を贈っていたところ、「教育学部を卒業し、難関のネパールの電電公社に就職できました。今は大学院修士課程に進学し、働किながら勉強しています」という手紙が届きました。

その上、妹のスリジャナも教育学部に合格したことを知り、彼女にも奨学金を贈ることにしました。卒業後、小学校の先生をやっている

ましたが、「村の医療の役に立ちたいので、保健婦の養成所で2年間勉強したい」と言ってきました。そこで友人と2人で奨学金を出していたところ、2年後に手紙が届き、「30人の受験者の中で私を含む3人が合格しました」と言ってきました。現在は学校の先生をやりながら、小さなクリニックで保健婦として働いています。

その後、この兄妹の子どもたち4人も、私と友人の奨学金を得てインドやオーストラリアの大学院で学び、海外でエンジニアやシニア看護師として活躍しています。現在は母校の貧しい学生たちのために彼らがお金を出し合って、奨学金制度を設けています。

彼らの成長は、家が貧しくても機会があれば大学で学び、知識と技術を身に付け、豊かな生活ができることを物語っています。校長先生は「皆、ゴパールに続け!」と生徒たちを励ましています。このように私が蒔いた種は、少しずつですが確実に成長しています。今後とも微力ながら村の発展と教育の質の向上のために、活動が続けていくつもりです。

REPORT

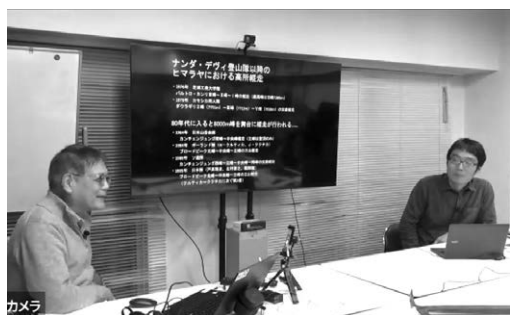
「山岳会のヒトとモノ」講座

第3回「ナンダ・デヴィ縦走」を開催

資料映像委員会委員長 飯田 肇

資料映像委員会と記念事業委員会PJでは、日本山岳会所蔵の貴重な人物(ヒト)と資料(モノ)を広く紹介する目的で、1月24日(金)18時30分からルーム104号およびリモートで第3回「ナンダ・デヴィ縦走」講座を開催しました。会場で約30名、リモートでは約100名の方に参加いただきました。

講座では谷山宏典氏(フリーライター)、日本山岳会と古野 淳氏(前日本山岳会会長)をナビゲーター



ナビゲーターの古野前会長(左)と谷山会員

ーとしてお招きし、おふたりの豊富なヒマラヤ経験や知識を交えて進められました。さらに、鹿野勝彦氏(1976年ナンダ・デヴィ登山隊長)にも参加いただき、当時の様子を臨場感を持って伺うことができました。また、会場には多くの隊員の皆さん(梶、重廣、桐生、小原、丸尾、小林(リモート)の各氏)にもお越しいただき、当時を振り返っていただきました。

講座ではまず、多くの岳人に親しまれる歌「いつかある日」が流れました。作詞者のロジェ・デュプラ率いるフランス隊は1951年に初めてナンダ・デヴィの縦走を試みましたが、デュプラは主峰を目指しながら消息を絶ちました。ナンダ・デヴィを象徴する歌です。

また、記録映画「インド・ヒマラヤ、ナンダ・デヴィ初縦走」(NET制作)から抜粋した映像も映し出されました。岩登りルートのようなゴルジュの通過や、裸足のボーターが雪のダランシ・パスを越

える映像から、キャラバンの困難さが実感できました。さらに、縦走隊とサポート隊が無事合流したシーンからは、ヒマラヤでの縦走がいかに困難であるか、それを成し遂げるためには強い絆とチームワークが必要であることがよく理解できました。ナビゲーターからも、ヒマラヤ縦走の困難さは計画の複雑さにあること、そうしたチームワークが必要とされる登山こそ、大学山岳部出身者が主力となる日本山岳会チームに向いていたこと、などが語られました。

ヒトで特に採り上げたのは加藤保男隊員でした。高い登攀能力と強い体力・気力を持ち、異なる季節に3回エベレスト登頂を果たしています。残念ながら冬のエベレストで消息を絶ちましたが、時代をリードした花形クライマーでした。本隊では、加藤、高見、重廣隊員は社会人山岳会の出身者です。大学山岳部と社会人山岳会の混成チームをいかにまとめたかについて鹿野隊長は、目標・戦略などの徹底した共有が強いチームワークを生んだ、と語りました。

一方、モノでは、鹿野隊長が加藤隊員に託しエベレスト登頂を果



ナンダ・デヴィの西峰(左)と東峰。撮影:鹿野勝彦(『山岳』第71・72年より)

たしたピッケルと、1939年のポーランド隊の東峰初登頂時に使用、高見隊員が持ち帰ったハーケンが紹介されました。どちらからも、ヒマラヤの高峰で実際に使われた重みを感じられる逸品でした。

ナンダ・デヴィ隊は、ヒマラヤ縦走という困難な課題に立ち向かい、それを強固なチームワークで成し遂げたすばらしい隊だったことが、改めて実感できた講座でした。ナンダ・デヴィ登山隊の隊員たちはその後、1980年のチョモランマ北壁・北東稜、84年のカンチェンジュンガ縦走などで、日本山岳会の海外登山隊の中核を担う存在となっていました。

HISTORY READING

「偉大なるエベレストの謎」と
日本山岳会との関わり

ヨッヘン・ヘムレブ

ついて寄稿してくれた。(和田)

JACとエベレストの縁

昨年、100年前にエベレストでジョージ・マロリーとともに姿を消したアンドリュー・アーヴィンの登山靴が、ロンブク氷河で発見された。エベレスト初登頂を目指していた彼らが登頂したのか否か——。この謎に取り憑かれたように研究と搜索が続けている在イタリアの山岳歴史研究家ヨッヘン・ヘムレブ氏が、日本山岳会創立120周年のお祝いとして、JACと「エベレストの謎」の関係についてご紹介したい。

2025年の前年に当たる2024年は、イギリス人登山家ジョージ・マロリーとアンドリュー・アーヴィンが、エベレスト山頂付近で消息を絶つてから100年目の年である。2人が死亡する前に登頂していたのか？ という疑問を残したまま、彼らは姿を消した。また、2025年は、マロリーとアーヴィンが開拓したルートが、大規模な中国隊によって2度目の登頂を果たしてから50周年に当たる。

これら3つのストーリーが、1

979年のある日、交錯した。

マロリーとアーヴィンが、53年にエベレスト初登頂したエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイよりも29年前に登頂していたのか？ という問いは、登山界において最大の謎と広く認識されている。2人は24年6月8日の正午ごろ、エベレストの北東稜の8500mを超える地点にある岩場を登り終えた所で最後に目撃された。33年に稜線直下の8450m地点でアーヴィンのピッケルが発見されたのを除き、第2次世界大戦以前は、2人の痕跡は一切見つかっていなかった。そして、50年にチベットの国境が外国人に対して閉鎖されると、エベレストの北側は秘密に閉ざされることとなった。

会員の皆さんもご存じのとおり、JACや日本とエベレストの関わりは長年にわたる。69年、JACが率いる日本隊は困難な南西壁への初登攀を試み、翌70年には日本人初登頂を成し遂げた。また同年、三浦雄一郎は世界で初めてサウス・コルの頂上からスキーで滑降した。73年、加藤保男と石黒久はポスト・モンスーン期にエベレスト初登頂を達成し、75年、田部井

淳子は世界最高峰に到達した最初の女性となった。このような先駆的な業績を考えると、79年にエベレストが外国人に対して再び開放された際、最初に北側から登攀を試みたのがJAC隊であったというのは驚くには当たらない。

イングリッシュの遺体は誰？

さて、80年の本隊に先立ち、9人のJAC隊員が79年の秋にエベレストの北側ルートの偵察を行なったときのことである。その際、ノース・コルの下で3人の中国人隊員が雪崩に巻き込まれ死亡したが、事故の前日、中国人隊員の1人である王洪宝がJAC隊員の長谷川良典に驚くべき話を伝えたのである。その後、長谷川がアメリカの研究者トム・ホルツェルに次のように伝えた。

「王氏は、JAC隊員の1人である長谷川に、75年のエベレスト遠征に参加した際、2人の遺体を目撃した、と語った。彼は、東ロンブク氷河上のC3直下のモレーン付近で1人、そして、北東稜ルートの8100m地点で1人を見た、と話した。彼は英語を話さなかったが、長谷川に『イングリッシュ、



2011年の捜索隊に参加したときの筆者。ノース・コルにて北東稜と頂上(右)を背景に



1999年の調査隊のメンバーと。中央でしゃがんでいるのが筆者。後列左から2人目がコンラッド・アンカー

イングリッシュ』と繰り返し言った。最初の1人は、(34年に死亡したソロ登山家である) ウィルソンかもしれない。では、8100m地点にいた2人目の遺体とは誰だったのか? 彼が8100m地点で遺体の衣服に触れると粉々になり、風で吹き飛ばされていた。そこで彼は遺体に雪をかぶせ、埋葬した。」(鈴木郭之(注:当時の海外委員会担当理事) からトム・ホルツェル宛の書簡、80年2月7日)

それはマロリーの遺体だった

75年以前にエベレストの北側で、この高度で死亡した登山家は、マロリーとアーヴィン以外にはいなかった。したがって、王洪宝は2人のうちの1人を見つけたと言える。それは、40年以上にわたる「謎」の最初の証拠であった。

そして、80年のJAC隊は、見事なダブル・サクセスを収めた。ノース・コル隊は、クラシックな「マロリー・ルート」に新たなバリエーションを開拓した。1週間後、重廣恒夫と尾崎隆は、ホーンバイン・クロワールに直接入るルートで、北壁の世界初登攀を達成した。

王洪宝から伝え聞いた「イングリッシュの遺体」に関する長谷川の話は、その後、ホルツェルとイギリスの歴史家オードリー・サルクフェルドによる、86年の秋に行なわれた最初のマロリー・アーヴィン搜索隊に大きな影響を与えた。搜索は不成功に終わったものの、彼らは「マロリーとアー

ヴィンの謎(未邦訳)」という本を出版し、その本は私のキャリアを決定づけた。

私は87年、当時16歳でこの本を読み、すぐに夢中になった。約10年の研究の後、75年中国隊のC3の正確な位置を見つけることが、「イングリッシュの遺体」を発見するための鍵となるのではないかと考えた。その後、各国のエベレストに登ったクライマー(注:99年以前当時は多くない)に連絡をし、資料提供してもらった写真分析を通じてデータを集積し、推論を重ねた。これが99年の春に行なわれた「マロリー・アーヴィン調査隊」の基礎となった。そしてこの結果、5月1日、アメリカ人登山家のコンラッド・アンカーらが、中国隊のC3から約140m離れた地点でジョージ・マロリーの遺体を発見することになったのである。C3自体は、2001年の2回目の搜索隊で発見された。

それ以来、謎に対する私の情熱は現在に至るまで冷めることなく、さらに2回の搜索隊(2010年と11年の、エベレストの南側および南東側へのトレッキングに)つな

私の研究は、長年にわたりJAC前会長の古野 淳氏と会員の貫田宗男氏から資料提供などの貴重な支援を受けてきた。ゆえに、私は貴会の創立120周年を祝うだけでなく、JAC会員がマロリーとアーヴィンの物語に果たした大きな貢献についても称えたい。

【ヨッヘン・ヘムレブ】1971年生まれ、イタリア北部ラナ在住。登山史研究者、著作家および映像作家。25年以上にわたり、特にマロリーとアーヴィンの謎を研究している第一人者。

4回搜索隊に参加し、その過程を描いた著作『Ghosts of Everest』(邦題『そして謎は残った…伝説の登山家マロリー発見記』(海洋正彦訳、文藝春秋)は全世界で8言語に訳され、高い評価を得ている。

(翻訳:和田薫(国際委員会委員長))



NEWS

今年の植村直己冒険賞は吉田勝次さんに 国内外での未踏の洞窟探検活動を評価

今年で第29回(2024年)となる兵庫県豊岡市主催の「植村直己冒険賞」は、ケイバー(洞窟探検家)の吉田勝次さん(58歳、愛知県一宮市在住)に決まり、2月12日、植村の誕生日に、母校の明治大学で記者発表会が開かれた。ケイビングが授賞対象になったのは、今回が初めて。

吉田さんは本業の建設会社と、(株)地球探検社という洞窟探検に関する取材のコーディネートやサポ



植村直己の巨大写真をバックにオーバーオール姿で登壇した吉田さん

ート、ツアーなどを企画・運営する会社のゴザの草鞋を履いて活動。1年の3分の1を洞窟探検とその準備に費やしており、これまでに世界30ヶ国、1000ヶ所以上の洞窟に潜っているという。その足跡は自書『洞窟ばか』(2017年、扶桑社)に詳しい。

少林寺拳法などの武道やスキューバ・ダイビング、アマチュア無線技士など多彩な趣味や特技を持つ吉田さんだが、洞窟探検に一つながったきっかけは登山だった。23歳のとき、突然山に登りたくなつて山岳雑誌を読み、登山用具店に行つたところ、「あなたのような無謀な人には、用具は売れない。悪いことは言わないから、まずは山岳会に入るか、講習会を受けた方がいい」とのアドバイスを受ける。

そこで申し込んだ先が登山ガイド・長谷川恒男の登山講習会。「冬季雪山訓練」というのが格好良かったから、と言う。もちろん長谷川が世界的に知られたアルピニストであることを、全く知らなかつた。

た。いきなり10日間の訓練で、最終日には厳冬のハケ岳に登つたというから驚きである。

そして、5年間ほど目一杯山登りをやったが、いまいちトキメキやワクワク感が味わえなかった。現代は、国内外を問わず登山情報はあふれており、未知・未踏の要素が少なくなっている。そんなときあるアウトドア雑誌で見付けたのが、洞窟探検の記事だった。

吉田さんの決断は早い。ケイビング・クラブにコンタクトし、早速その週末、洞窟探検に連れて行ってもらう約束を取り付ける。その後も洞窟通いは続き、「知られている洞窟でも感動するのに、自分で発見した洞窟なら、どれだけ感動するだろうか」と、洞窟ばかは重症化していく。

1996年、日本最長の岩手県・安家洞^{あかどう}の探検調査に始まり、国内はもとよりマダガスカルや中国、東南アジア、メキシコ、チリ、イラン、キルギスなど未知・未踏の世界の魅力に取り憑かれて、世界中を潜りまくっている。近年は、2018年にラオス北部で世界最大級の可能性がある未踏洞窟の洞口を発見、その後2回の探検を経て

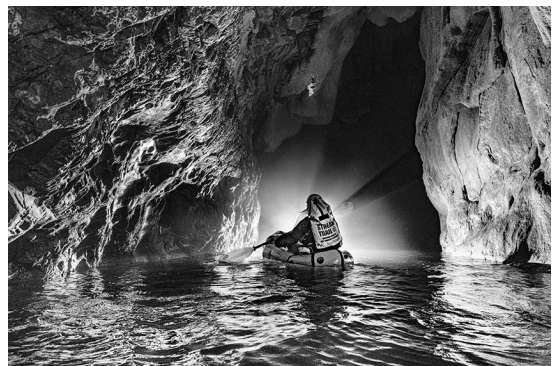
全貌解明に挑んでいる。

「洞窟探検は登山と違って頂上がなく、行ってみないと何があるかわからない。写真や映像を使って知らない世界を発表してあげ、洞窟ファンを増やしたい。これが私の社会貢献だと考えています。

洞窟探検は狭い、寒い、痛いなど、世の中の辛さが9割。残り1割の感動を求めて潜っています。たまにご褒美^{ほうび}として絶景など想定外の発見があるので、一生続けたいと思います」と吉田さん。

授賞式は6月7日(土)、植村直己の故郷、豊岡市で行なわれる。

(節田重節)



バックラフトを漕いで洞窟内の地下河川を進む 提供：吉田勝次



中谷 充(なかや・みつる)

会員番号7332 永年会員
盛岡山岳会会員・岩手蟲乃會会員
1927年2月13日 岩手県盛岡市に
生まれる
1949年 盛岡農林専門学校農学
科(現・岩手大学農学部)
卒業
1960年～ 岩手県高等学校登山専
門部常任委員
1991年～ 岩手県山岳協会副会長
1992～ 日本山岳会岩手支部第
3代支部長
2017年～ 岩手県山岳協会名誉会
員
2024年9月11日 逝去、享年97

蝶の研究者でもあった中谷充先生から「一時痛めた腰の調子も回復しつつあります。岩手のハイマツ帯に生息する希少種ベニヒカゲの生息観察のため久しぶりに山野を訪れることを楽しみにしています」とお便りをいただき、お会いできることを楽しみにしていた矢先の、突然のお別れです。

中谷先生は、登山活動とともに幼少のころから裏山を飛び交う昆虫に関心を持たれ、特にヒメコバチの研究に没頭するなど、岩手蟲の会会員として長年、昆虫の写真撮影や生息環境調査などで活躍されています。

中谷先生と初めてお会いしたのは60年前の昭和40(1965)年で、私が高校2年の高校総体のとき。県高校登山専門部が発足して6年目で、高校生の冬山登山が条件付きで認められていたところで、県高体連登山専門部の創設に奔走され、登山専門部の要職を担っていました。当時、中谷先生は、紫波高校(現・紫波総合高校)山岳部の顧問として名伯楽ぶりを発揮され、県

中谷 充先生を偲んで

高橋時夫

追

OBITUARY

悼

内高校女子最強チームを率いておられました。羨望のまなざしで見ている中谷先生が、間もなく我が母校に赴任。県下有数の強豪校に導き、インターハイ常連校にまで育ててくださいました。

1992年5月から2003年4月まで11年間、日本山岳会岩手支部長として支部の発展期を築かれています。当時の日本山岳会会長で、昆虫をはじめ生態学の研究者で登山家でもあった今西錦司さんとは、登山家、昆虫研究者として焼石岳など岩手の山案内を務められ、親睦を深められています。その縁は、京都支部の皆さんとの交流へとつながっています。

岩手支部活動では、北アルプス遠征や広い県域の三角点踏査、学術登山に注力した活動を実践され、この活動は現在も支部活動に脈々と引き継がれています。また、今年で57号を迎えた「岩手支部通信」を創刊し、会員への切れ目のない情報伝達に努められています。

この間、昭和45(1970)年の岩手国体当時から盛岡山岳会に籍を置き、県山岳協会の副会長や名誉会員など本県山岳界の重鎮として、高体連登山専門部と県山岳協

会との連携に注力いただいています。また、教育登山活動を通じて多くの高校生の人格形成や顧問の指導にも尽力され、これらの功績により、平成26(2014)年に岩手県社会体育功労表彰を受けられています。このように、本県山岳界発展の礎を築いていただいた恩人でもあります。

中谷先生からは、至宝のごときたくさんのおアドバイスをいただき、特に山に向かう真摯な姿勢と直言居士としてのお人柄は、私にとつては精神的支柱でもありました。

今も記憶に鮮明に残る中谷先生は、酒は口にせず、若いころはヘビー・スモーカーで口数少なく、物静かにアドバイスをしてくれる姿です。後ろに手組みし、昔懐かしいサブザック姿でゆつくりと山道を登る姿が懐かしく思われます。

中谷先生の人生は、好きな昆虫観察と登山に打ち込んだ、満ち足りた人生であったと推察しています。先生の好きだった言葉「故旧忘れ得べき」を思い起こし、先生を偲んでいます。中谷 充先生、ありがとうございました。

合掌

(岩手支部会員、前岩手県山岳スポーツクライミング協会会長)

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

⑶『アルプス記』（松方三郎著・龍星閣）

芳賀孝郎

私の学生時代は毎年、新入部員が入ると松方三郎先輩の新人歓迎の言葉があった。

「山岳部はほかのスポーツ・クラブと異なり、相手は人ではなく自然であり、山である。山に対する姿勢は堅強な気持ちでないと命を失うことがある。山には審判員がない。困難か危険かの判断は、自己判断である。すなわち自己責任を求められる。山には観客がない。登頂したかどうかは本人のみ知ること、自己申告である。それにはフェアプレーの精神が要求される。すなわち紳士である。君たちは紳士の卵である」と歓迎された。



昭和12（1937）年初版発行

1958年、私が参加したチョゴリザ登山隊の隊員選考の最終面接者は、松方先輩であった。共同通信社の役員室に入ると英語での面接で、いろいろと質問を受けたことで困り果てたことは、今でも夢に出てくる。

日本山岳会のある集会で、松方先輩は「このごろの山岳会会員は化石が多くなった。その化石がものを言うので、さらに困ったものだ」と話して会員が大笑いしたことがあった。当時、75歳以上は化石であった。今は90歳以上が化石だと思う。化石になった私が『アルプス記』を語ると、天国の先輩がお困りのことと思う。

松方三郎（1899～1973）は、薩摩藩士で明治の元勳・松方正義公爵の13男として東京で生まれた。学習院から京都大学に入学、経済学部を卒業した。1921（大正10）年1月、積雪期燕岳スキー登山

初登頂、22年3月、積雪期槍ヶ岳初登頂、同年7月、槍ヶ岳・北鎌尾根登攀、同月、奥穂高岳では6名のスリッパをザイルで止めて負傷した。

25年から27年まで、ヨーロッパ留学中にマッターホルン（4回）、モンテ・ローザ、グレボンなどを登り、アイガー・ヘルンリ稜からの初登攀記録を作った。

『アルプス記』は「ドーフィネ日記」から「アルプスとどこどこ」「ある山小屋」「画家・セガンティーニと彼の山」などアルプスの12の文章から始まっている。先輩がセガンティーニの絵を日本山岳会に寄贈していることは、ご存じのとおりである。

「机上の彷徨」では辻村伊助、大島亮吉、板倉勝宣ら3人の登山家の人物像や性格を鋭く描いている。特に同期の板倉については強い印象を持っていたようだ。また、富士山を愛した先輩は、『アルプス記』にも多く富士山を書いている。先輩から富士お中道巡りを誘われたが、参加できなかったことを今でも残念に思っている。

ヒマラヤについては5つの文章があり、1933年の英国エヴェレ

スト隊について詳しく書いている。先輩が70年、念願のエヴェレスト登山隊隊長を務めたことは幸運であった。

「神河内」では、英国でウェストンに上高地の現状を報告した様子が愉快である。最後の「山ごころ」では、山で育てられた人間は、どんな環境に放り込まれても山を探し出す人種なのか、と結んでいる。

先輩はジャーナリストで、簡潔明瞭で誰でも理解できる文章家であり、博学でかつ多くの趣味を持っており、幅広い人々との交流は驚きであった。その一端が『アルプス記』に表現されていると思う。

『アルプス記』を出版する前、1929年から英国山岳会を見習い、日本山岳会の改革に乗り出した。虎ノ門にルームと図書室を持ち、運営も選出された理事が当たり、会長、副会長を設け、『山岳』の編集を担当、会報を発刊した。その情熱で今日の日本山岳会の基礎を創られた方である。

現在、平凡社ライブラリー（1997年初版発行、税込み1100円）で読むことができる。

（学習院大学輔仁会山岳部OB・山櫻会会員）

『山行』 (横有恒著・改造社)

互井健悟

功成り名を遂げた老人が昔日を懐古した、古色蒼然たるアルプス登山記ではない。厳冬の立山で、かけがえない親友を失った直後の28歳の青年が、人生初の蹉跌さつてつの中でそれまでの軌跡を振り返った心の記録である。

晩年の自著『わたしの山旅』では、生い立ちと幸運に恵まれた人物が、積雪期登山と岩登りの概念を日本に初めて伝え、いくつかの国際的な記録を樹立するという順風満帆な人生が語られる。だが、早川種三が一周忌に語ったように、就職難、師の暴走、敗戦、公職追放、事業の失敗など、むしろ多難な人生だったと見ることもできる。

本書はそんな横の最初の著作であり、大正12(1923)年1月の遭難事故で負った凍傷療養中に



大正12(1923)年初版発行

鹿子木員信かのこぎかずのぶの勧めで起稿され、同年4月末に脱稿、第六章は5月の雑誌『山とスキー』に、第七章は7月の慶應義塾山岳部報『登高行』に並行して掲載され、同月に単行本として刊行された。

第一章「山と或る男」は、終生敬慕した恩師との出会いを暗喩あんゆする詩的寓話で、8年前の山岳部設立時に掲げた「檄文」を敷衍ふえんした内容となっている。通底するのは鹿子木の強い影響であり、その衝撃を伝え得るこれ以外の表現手段は存在しなかったに違いない。

第三章「登高記」が本書の主題であり、アイガー・東山稜初登攀に至る2年間の登山活動が綴られる。これに対して第二章「アルペンにおける登山の発達」、第四章「南側のアルペン」、第五章「山村の人と四季」は、それぞれ彼の地の登山史概略、北イタリアの地誌、グリンデルヴァルトの生活素描となっている。

現代の登攀記とのあまりの違いに拒否感を抱く方もおられようが、前例のない未知の世界に直面した

ひとりの若者が、いかにして環境に適応し、山々を総合的に感得できる心理状態に至ったかを説明するための不可欠な要素であり、本書の主題である第三章と第六章をつなぐ重要な役割を担っている。

その意味では、昭和23(1948)年の再版に際し第三章に追加されたカナダ・アルバータ峰関連の2編が主題を不明確にした感は否めず、同時に行なわれた改訂では、表現の瑞々しさや文章のリズムが損なわれてしまった。横がどこを削り、何を加えたかの考察は、その人物像を知るための重要な手掛かりとなる。

本書を読むに当たっては、国会図書館デジタル・ライブラリーで初版を併読することを勧めたい。

第六章「板倉勝宣君の死」は、本書のもう一つの主題であり、本邦初とされる厳冬期登山における凍死遭難事故を率直に振り返っている。章末近くに前年夏の涸沢の岩小舎で夜半にひとり起き出し、シューベルトの歌曲「魔王」を口ずさみながら焚火に薪をくべる板倉の姿を回顧する箇所がある。横はここで、抱きかかえた我が子を夜の風雨から守るため馬を疾駆させる

歌曲の中の父親の姿に、仲間を労わる板倉の姿を重ねている。守る者と守られる者の立場は逆転し、庇護者としての努力も空しく灰燼に帰した苦悩を伝える、見事な比喩となっている。

第六章に並置された第七章「岩登りについて」は、藤木九三の「岩登り術」、舟田三郎の「岩登」に先立つ日本初の本格的な岩登りの技術解説とされ、ページ数こそ見劣りするものの、記述の明晰さでは後発の両書を凌いでいる。

本書は、大正末から昭和初年にかけて広く読まれ、憧憬、羨望、模倣、反発、対抗心など様々な反応を惹起しながら、多年にわたり各方面に強い影響を及ぼした。行為の意義に葛藤し、山を介して人生を問う内容には普遍性があり、100年前の世相との類似性が指摘される今日、偶像化による思考停止と疑義の多い評伝類に違和感を覚える若い方々にこそ、まず手に取っていただきたい一冊である。

現在、中公文庫の改訂版(2012年初版発行、税込み1026円)が出ている。

(慶應義塾体育会山岳部OB・登高会会員)

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

「槍ヶ岳登山を果たした芥川龍之介一行の写真」の撮影者について

小原茂延

「会報」954、955号の2号にわたり、当欄に掲載された牛丸工氏執筆による「芥川龍之介の写真発見」記事について目が止まった。芥川の槍ヶ岳登山については芥川の書いた『槍ヶ岳紀行』自体が途中までで、登頂したか否かを知るべくもなかった。その後、同行の某氏が芥川の登頂を証言したというのを伝聞したに過ぎなかっただけに、今回の牛丸氏による調査、検証を読むと地元ならではの資料・証言などを確認しており、特定に迫ったもので信憑性があるものと思われる。

さて、牛丸氏が同稿（下）で、芥川一行の上高地での写真を撮った

人物とする加山竜之助について詳細は不明であると言いい、わずかに書物展望誌に「小島鳥水氏の追憶」を寄稿しているとの由、松本市周辺在住の信州人ではないかと推測している。その後段で加山は鶴殿正雄の奥穂ヶ槍の縦走登山に参加し、前穂の三角点櫓で記念写真を撮影したとある（加山と一部同行者は前穂までで、縦走には参加していない）。

そこまで読んで、ハタと思いついたのは、ひょっとすると、あの本に載っているかもしれないとの記憶がよみがえった。その本とは上條武著『孤高の道しるべ』、副題として「穂高を初縦走した男と日本アルプス測量登山」銀河書房（長野市）1983年刊であって、繙（も）いて探すと、案の定短い紹介ながら加山竜之助について若干の記述があった（134～136ページ）。少し長いが引用する。《……とこ

ろで、穂槍初縦走の快挙を、『山岳』の編集者はともかく、いわば誰よりよく知っていた重要な人物がいた。鶴殿が山岳会第二回大会で顔を見知ったと思われる加山竜之助である。加山は当時北アルプスにもよく登り、のちに日本山岳会が発行した山岳写真集『高山深谷』にも作品を掲載している草創期の数少ない山岳写真家でもあった。

彼は鶴殿の「穂高岳槍ヶ岳縦走記」の中で一役買っている。彼は当時横浜市石川仲町七丁目百三十九番地に住み、鶴殿と深い交際を続けた。加山から鶴殿にあてた写真葉書が多く残されており、その一部は貴重な写真とともに、穂槍初縦走の側面を新たに解明できる貴重なものである。（中略）著者（上條武）は、加山竜之助の消息と遺族を横浜にたずねたが、昭和五年十月十三日に横浜市鶴見区鶴見町二百五十三番地に転居し、そこで戦災にあっているという。以後の消息は残念ながらわからなかった。また日本山岳会からは『山岳』に出ている以外はわからない」との返事であった。（筆者注・上條氏が執筆当時のことと思われる）

筆者が、明治40年の山岳会第二

年第一号附録の「会員氏名」で確認したところ、鶴殿正雄は、通し番号で333（会員番号ではない）前後にあり、住所は赴任地の韓国（本来は、信濃國小県郡長瀬村）となっている。彼の4、6番後に長野県松本町の河野齡藏、矢澤米三郎の名がある。しかし、加山竜之助の名は明治41年6月発行分まで見当たらなかった。

最近になって、日本山岳会神奈川支部報第15号（2020・7・1）に連載された砂田定夫氏による「丹沢おぼえがき（7）」―丹沢山で出会った2組の先蹤者たち―の中に、加山龍之介の名を見つけた。その記事によれば1918（大正7）年5月のことで、丹沢核心部に登山者が入り始めたところという。一組は日本山岳会横浜支部の北澤基幸・加山龍之介一行で、もう一組は日本山岳会の戸澤英一・藤島敏男のパーティで、戸澤パーティが12日に丹沢山の山頂に登り着いたときに出会ったといい、「やはり山で人に会うという特有の懐かしさと親しみの情とにかられて……お互いに好きな山の話にふける」とそのときの感情を書いているそうだが、それ以外加山についての言

及はなかった。本年1月になって、日本山岳会事務室に未調査であった『山岳』第三年第三号以降の新入会員をチェックしていただいたところ、第四年第二号(明治42(1909)年6月刊)に加山竜之助の名があり、住所は横浜市石川仲町七丁目である旨の回答を得た(事務室図書担当の豊泉氏による。本会web版では会員氏名は公表して

いない)。

加山竜之助の写った写真は、前掲書『孤高の道しるべ』の本文中にあり、明治42年8月15日の前穂高岳山頂の三角点櫓の鶴殿・嘉門次ら一行を加山が撮った写真は口絵にあるが、鶴殿正信氏所蔵とあり、著作権等を考慮して掲載を控えた。(資料映像委員/埼玉支部 小原茂延)

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

図書委員会

第40回 図書交換会報告

去る2月1日、日本山岳会のルームにおいて図書交換会が開催された。2023年12月の年次晩餐会での開催以来となる。

21名の会員から単行本、文庫、洋書など440冊を超える出品があったが、図書室に収蔵されていないものや資料的価値のある本は、図書室に受け入れさせていただ

た。これに加えて、図書室に新刊が入庫したため不要になった旧版地図やガイドブックなどを含め、約500冊が対象となった。入札本3点のほか、名著と言われるものや、なかなか手に入らない貴重な本、古い『山岳』などが出品された。今回は104号室と図書室を利用して、ブックスタンドを作成して立て掛ける方式とした(一部は平置き)。

メールやファックスで事前に約



104号室に並べられた書籍を見て申込み来場者

50人から、延べ600冊の申込みがあった。当日は前回ルームで実施したときよりもずっと多くの方が来場された。遠方から来場された方もあり、熱心に書籍を見て申込み姿を見ていると、やはり今後とも日本山岳会の伝統行事として継続実施していく催事だと感じる。また、『山岳』など貴重な資料的価値のある書籍の散逸を防ぐ観点からも有効な手段であると再認識した。

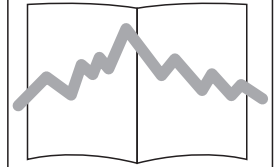
申込み者が2人以上の書籍については、来場された会員が見守る

中、目の前で全て厳正な抽選を行った。ほぼ全部の書籍が購入され、発送も3日に完了した。すでに代金も振り込まれ、経費を除いた金額を委員会会計に繰り入れさせていただいた。

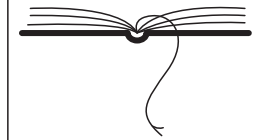
図書交換会の主旨は、山岳書の散逸を防ぐことと、良い本を廉価で、より多くの会員に受け取っていただくことにあり、毎回運営には工夫をして開催しているが、今回はこの主旨に沿って、抽選での当選数に上限を設けるなどの対応を行なった。

ただ、まだまだ運営上の課題はあり、今回の反省点を踏まえ改善を図っていききたい。そのひとつに、もっと若い会員に山岳書に興味を持ってもらい、交換会にも来場してもらえようという思いがある。現在、会報『山』では図書紹介に加え、山岳書の名著を紹介する「名著再読」をシリーズ掲載しているが、図書交換会を、もっと山岳書に興味を持ってもらう機会としてとらえ、多くの会員に来場してもらえよう、PRも含めて、いっそう工夫していききたいと考えている。

(図書委員会委員・荒井正人)



図書紹介



41人の嵐

桂木 優著



2024年7月 山と溪谷社刊
文庫判 244頁
1100円＋税

本書は昭和57(1982)年の夏、南アルプスの両俣小屋を訪れた大学ワンゲル部5校と社会人1組、そして、小屋番2年目の両俣のお姉さんこと星美知子さん(著者本名)たち41人が、数十年に一度の巨大台風10号で壊滅した両俣小屋を脱出し、極限の状況のなか奇跡的に北沢峠にたどり着くまでの壮絶なドキュメントである。

遅い梅雨明けとなった7月31日、両俣にも待ち焦がれた夏空が広がった。夏山シーズンの到来に小屋番の気分は爽快であったが、ラジオが告げる台風10号の上陸が気が

ない! 裏山に行けえ」小屋番が必死に叫ぶ。両俣小屋の安全神話は流れる岩とともに崩れ落ちた。浸水した小屋には1mの穴が空き、女子学生が転落、引き上げるも登山靴が流された。大あわてで裏山への緊急避難が始まった。

小屋番は一斗缶に25本の傘を詰め、後を追う。豪雨の闇の中、ヘッドランプを頼りにとにかく上へ、上へと安全地帯を目指す。全員が集まった場所では小屋番が持参した傘を広げ、体を寄せ合い、声を限りに歌いながら豪雨の夜を過ごす羽目となった。

8月2日、小屋の様子を偵察した結果、1階は浸水しているが2階は使えそうとのことで全員小屋に戻った。台風は通過したようだが雨がやんできた。幸いにも流されなかった食料に加えビール、ウイスキー、煙草までもがあった。これで助かった、もう大丈夫だと全員が思った。

だが、全員が眠りにつき始めたころ、小屋番は1階の様子がおかしいのに気がついた。あろうことか1階は泥水の激流と化していた。しばらくすると水は引き始めたが土石でどんどん埋まってきた。水

は押し寄せたかと思うとしばらくは静かになった。そしてまたどつと押し寄せた。このまま続けば1階は土石で埋め尽くされ、2階も浸水し小屋から脱出できなくなる。小屋に戻れば大丈夫とみんなを連れて来たのになんてことだ。情けないが、もう自分の力ではどうにもならない。「北岳、間ノ岳、両俣の神よ、雨を降らせないでくれえー、鉄砲水を止めてくれえー」小屋番にできることは、ただひたすら悲痛な祈りを捧げることだけだった。

明け方、小屋番は小屋を出て全員で北沢峠まで行くことを決断する。衰弱した体で仙丈ヶ岳を越え北沢峠まで1日で行くことは生半可なことではないが、生きるための選択肢はそれしか残されていないかった。そして、生きて帰るための強行軍が始まった。靴を失い靴下を4枚履いた女子、借り物の運動靴を履いた女子、全員がびしょ濡れのままひたすら急斜面を登り切った。

稜線に飛び出すと容赦なく暴風が襲い掛かる。止まると凍えて動けなくなるので歩くしかない。全員で声を掛け合い、倒れる者の荷

第79回ウエストン祭のお知らせ



英国大使 エミール・エペンドルー閣下

第79回目を迎えるウエストン祭は、日本山岳会創立120周年を記念してウエストン師の母国から駐日英国公使、エミール・エペンドルー閣下をお迎えして開催することとなった。昨年天皇皇后両陛下が英国をご訪問された際、バックingham宮殿で行なわれたチャールズ3世国王陛下主催の晩餐会において国王陛下は、19世紀後半にウォルター・ウエストンをはじめとする英国登山家が、日本の山岳風景に魅了され、日本国内に「レクリエーション登山」を広める手助けをしたことに触れられ、両国の長く深い交流を讃えられた。

私たちは、120年以上前にこのような役割を果たされたウエストン師の功績を讃えるウエストン祭を開催していることに誇りを持ち、師が私たちに残してくれたことと、師の肖像がなぜ上高地にあるのかを理解し、次の世代にしっかりと引き継いでいく責任を感じている。

本年79年目を迎え、時あたかも日本山岳会創立120周年に当たり、英国駐日公使閣下をお迎えできることはこのうえない慶びである。主管する信濃支部としても、これをしっかりと引き継いでいくつもりである。

■第79回ウエストン祭

【徳本峠記念山行】

5月31日(土)午前6時 島々公民館前に集合し、出発式の後、徳本峠に向かう(島々谷は不通となっていたが復旧した。しかし、大雨により崩れることもあるので、事前に確認をお願いする。参加者の自己責任とする)。

【碑前祭】

6月1日(日)午前10時 上高地ウエストン広場にて開催。日本山岳会会長挨拶、安曇小学校児童による献花、献歌など式典の後、記念講演を開催。エーデルワ

イスクラブほかの皆さんの合唱。

【記念講演】

講師＝駐日英国公使エミール・エペンドルー閣下(2023年10月、駐日英国大使館公使として着任。オックスフォード大学マートンカレッジ卒業後ケンブリッジ大学、カリフォルニア大学バークレー校両校にて修士課程修了。趣味はサイクリング) 演題は「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国(英国)と日本国の親密なる交流の歴史」

【記念品】

手拭い「奥穂高岳吊尾根とウエストン師像」、記念ブローチはピン「ゴゼンタチバナ」。1セット1500円で頒布する。

【関連行事】

「ウエストンが愛した上高地展」上高地インフォメーションセンター 2階展示室 4月25日(金)～6月8日(日) 連絡先 ☎090・1691・0466 ☒VEU00522@nifty.ne.jp 古幡開太郎(信濃支部)

(実行委員長・古幡開太郎)



記念ピンバッチ (ゴゼンタチバナ)

物を持ち、わずかな食料を分け合い、仙丈ヶ岳を目指した。「がんばー、がんばー、フアイトー、フアイトー」風雨のなかワンダラーの声が響く。そして、小屋脱出から11時間、北沢峠の長衛荘にたどり着いた。両俣小屋に避難せずテント場に残った2校の16名も同ルートで前日に北沢峠に着いたのとこのだった。これで両俣を脱出した41名全員の無事生還が確認されたのである。

本書は台風10号の猛威の前にひれ伏すことしかできなかった小屋番の思いを克明に描いている。登山者を守ろうと必死に考え動くが、自分の判断の甘さに悔やんでも悔やみきれないと嘆く。だが、登山者の命を必ず守るんだという小屋番の熱い使命感こそが、41人の生還という奇跡をもたらしたのだと私は思う。あれから42年、若きワンダラーたちは就職し、家庭を持ち、すでに孫までできた方も現われた。孫を連れ、再建された両俣小屋を訪れる日も近いことだろう。この地で41人全員生還という大きな仕事をやり遂げた両俣のお姉さんが、「よく来たね」と歓迎している姿が目に見えよう。

本書は1984年に『41人の嵐
1982年台風10号の一記録』と
して自費出版されているが、昨年

8月に山と溪谷社より文庫本(定
価1210円)として発行された。
(図書委員会担当理事・松田宏也)



令和6年度第10回(2月度)理事会 議事録

日時 令和7年2月13日(木)19時00
分〜21時00分
場所 集会室およびオンライン
(zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生・

飯田各副会長、長島・南久
松・平川各常務理事、松田・

川瀬・望月・原田・猿渡・
久保田各理事、石川・清登

各監事

【欠席者】池田理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・東京支部の設立について(松
田)(賛成13、反対0)

2・『山岳』編集委員会委員長(編

集長)の交代について(久保田)

(賛成13、反対0)

3・令和6年度後期海外登山助成
申請について(桐生)(賛成13、反
対0)

4・創立120周年記念式典にお
ける国際交流事業の実施について
(桐生)(賛成13、反対0)

【協議事項】

1・令和7年事業計画について協
議した(長島)

2・委員会・支部長ヒアリングに
ついて協議した(長島)

3・外部理事、監事の採用につい
て協議した(長島)

4・中期計画の策定について協議
した(長島)

【報告事項】

1・入会者承認報告について(橋
本)

2・紺綬褒章の授賞について(長
島)

【その他】

1・「山」1月号の進捗状況につい
て(節田)

ルーム日誌 2月

1日 図書交換会(図書委員会)

記念事業委員会(コーカサ
スの桜)

3日 図書委員会 記念事業委員
会(山岳古道調査)

4日 広報委員会 スケッチクラブ

5日 山行委員会

6日 常務理事会 YOUTH
CLUB委員会 山岳地理
クラブ 紫蘭会

7日 入会説明会

12日 かつぱの会 休山会 山想
クラブ

13日 理事会

14日 総務委員会 図書委員会

15日 アルピニズムクラブ

17日 総務委員会

18日 自然保護委員会 麗山会

東京支部の設立総会を 開催します

日本山岳会34番目の支部と
なる「東京支部」を設立します。
去る2月13日に行なわれた本
部理事会で承認されました。
一昨年から本格的な検討を始
め、昨年夏から設立のための
プロジェクト・チームを設置、
9月に世話人チームを発足さ
せて設立の準備を始めました。
準備には若い番号の会員が中
心となって、自分たちの新し
い支部を創るために取り組ん
できました。

4月16日には設立総会を東
京・市ヶ谷で行ないます。ま
た、同時に東京支部の支部員
の募集も開始しています。詳
細は、会報「山」2月号に同封
されたチラシもしくは本部ホ
ームページに掲載されていま
す。「みんなの東京支部」を目
指して、支部の運営は支部員
全員で行なうことを標榜し、
関係者一同張り切って準備を
しております。

皆様の参加をお待ちしてい
ます。

(東京支部設立世話人一同)

19日	バックカントリークラブ 東京支部設立プロジェクト つくも会 三水会 アルパ インスキークラブ(幹事会)
20日	科学委員会 山遊会
21日	自然保護委員会 登山講習会
25日	山の自然学クラブ 00会 平日クラブ
26日	子どもと登山委員会 緑爽会
27日	グレート・ヒマラヤ・トラ パース みちのり山の会
28日	記念事業委員会 クニ塾 2月来室者 269名
中尾正武(2525)	25・1・6
野上成男(5856)	24・10・22
橋本正人(5869)	24・8・30
喜熨斗政夫(11687)	24・10・24
堀井 弘(11785)	25・1・31
渡邊正之(16144)	25・2・8
退会	
鶴田健蔵(8639)	
濱谷光安(9280)	東海
五月女進一(9346)	
茂木洋子(10461)	
七澤恭四郎(11464)	越後
加藤義夫(12273)	越後
滝川敏康(13960)	千葉

角田公雄(13979)
田中隆平(14482) 岐阜
海老澤賢一(14636)
飯田建夫(14882) 福岡
森 義雄(15387) 北九州

I
N
F
O
R
M
A
T
I
O
N

インフォメーション

江面孝子(15771) 四国
大野和子(16401)
石橋明博(A0373) 群馬
笹島俊成(A0426) 東京多摩

◆登山家 岡野金次郎の講演会

神奈川支部

岡野金次郎は日本山岳会設立の陰の恩人であり、彼と盟友小島鳥水との槍ヶ岳登頂は、日本人による近代登山の幕開けと称されています。昨年10月に岡野金次郎についての初めての本格的な評伝『孤高に生きた登山家 岡野金次郎評伝』(山と溪谷社刊)が出版されました。著者を迎え、講演会を開催し、その功績と人となりを広く紹介します。5月10日開催の第2回岡野金次郎碑前祭と併せて、彼の功績に思いを馳せる機会とします。日時 4月27日(日)14時～15時30分
会場 かながわ県民センター 5

03号会議室(定員60名)

横浜市西区鶴屋町2丁目24

・2(横浜駅西口から徒歩5分)

講演 「近代登山が開花したまち

横浜と岡野金次郎」(神奈

川ゆかりの登山家 岡野金

次郎の足取り」講師Ⅱ鈴木

利英子 ②「岡野金次郎と

横浜の山岳コミュニティ

講師Ⅱ鈴木遥

参加費 無料(要事前申込み。定員

になり次第締切り)。

申込み 神奈川支部・中島

jac.kanagawashibu@gmail.

com

書籍の販売 『孤高に生きた登山

◆第2回岡野金次郎碑前祭

神奈川支部

家 岡野金次郎評伝」(山と溪谷社刊 2970円)を販売いたします。購入希望の方は申込みの際、購入する旨お伝えください。

岡野金次郎は1902年に小島鳥水とともに槍ヶ岳に登頂し、この快挙は日本における近代登山の幕開けと呼ばれています。晩年は平塚市で過ごし、没後の1961年、平塚市湘南平に平塚市により顕彰碑が建立されました。

生誕150周年に当たる昨年、

第1回岡野金次郎碑前祭を開催し

ました。今年第2回岡野金次郎碑

前祭を次のように開催いたします。

日時 5月10日(土)14時30分～15時

40分(小雨決行)

会場 平塚市湘南平 岡野金次郎

顕彰碑(前)

式次第(予定) 1・主催者挨拶Ⅱ神

奈川支部長、来賓挨拶Ⅱ平

塚市長、日本山岳会会長

2・献花Ⅱ平塚市長、岡野

氏ご子孫 挨拶Ⅱ岡野金次

郎氏ご子孫 3・岡野金次

郎について『孤高に生きた

◆ウエ ストーン 祭79年 の記録 —展示 主権 自然公園財団上高地支部 協力 日本山岳会信濃支部、安曇 野山岳美術館	日時 4月25日(金)～6月8日(日) 上高地インフォメーション センター 2階展示室	場所 上高地インフォメーション センター 2階展示室	内容 ①ウォルター・ウエストーン 師 ②北アルプス ③上高地の自然と歴史 ④ウエストーン祭の記念手拭いとプロ ーチ	問合せ 古幡開太郎 ウエストーン 祭実行委員長 ☎090・ 1691・0466	連絡・ 問合せ 神奈川支部・中島 ☎090・7739・56 34 a.toukoku@gmail. com	交通 路線バス利用(往路JR 平塚駅北口発13・13 湘南 平着13・36 復路JR湘南平 発16・45 平塚駅北口着 17・08)	登山家—岡野金次郎評伝 —『著者 鈴木遙氏 挨拶 』小島烏水ご子孫 4・フ ルト演奏

図書受入報告(2025年1月～2月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
鈴木正崇	山岳信仰と修験道	427p/20cm	春秋社	2025	出版社寄贈
角幡唯介	地図なき山：日高山脈49日漂泊行	288p/20cm	新潮社	2024	出版社寄贈
荻田泰永	君はなぜ北極を歩かないのか	415p/18cm	産業編集センター	2024	出版社寄贈
ニルマル・ブルジャ/西山志緒訳	最強登山家ブルジャ：不可能を可能にした男	383p/19cm	集英社	2024	出版社寄贈
服部文祥	今夜も焚き火をみつめながら	256p/19cm	モンベルブックス	2024	出版社寄贈
内田嘉弘	写真で見る若き日の山行	86p/21cm	私家版	2024	著者寄贈
いちのへ義孝	白い山八甲田山	80p/18cm	いちのへ義孝写真事務所	2025	著者寄贈
大島康弘	中央分水嶺 やぶ漕ぎ物語：龍飛崎から谷川連峰へ1000km	584p/22cm	山と溪谷社	2024	著者寄贈
やまとけいこ	黒部源流山小屋暮らし/ヤマケイ文庫	272p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
富山県警察山岳警備隊編	富山県警レスキュー最前線/ヤマケイ文庫	368p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
岐阜県警察山岳警備隊編	岐阜県警レスキュー最前線/ヤマケイ文庫	368p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
羽根田治	山岳遭難の傷痕：十重大事故から読み解く/ヤマケイ文庫	424p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
尾崎喜八	私の心の山：尾崎喜八選集/ヤマケイ文庫クラシックス	592p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
谷口ジロー	捜索者/ヤマケイ文庫	344p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
桂歌丸	岩魚の休日：釣れてよし、釣れなくてよし、人生竿一竿/ヤマケイ文庫	232p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
山階鳥類研究所	鳥の教科書：山階鳥類研究所のおもしろくてためになる/ヤマケイ文庫	336p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
ジョナサン・フランクリン ／井口耕二訳	A Wild Idea ザ・ノース・フェイスの創業者はなぜ会社を売ってパタゴニアに100万エーカーの荒野を買ったのか?	384p/21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
笹倉孝昭	完全図解山岳セルフレスキュー教本	160p/21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
山と溪谷社編	多摩ハイク：京王線・小田急線・JRで気軽に行ける多摩丘陵・町田・高尾・青梅の山と街歩き	128p/21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
CAMPLIFE編集部編	キャンプの名品哲学：Iconic Camping Gear	128p/21cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
佐藤徹也	完本東京発半日徒歩旅行：決定的保存版「朝寝した休日でもたっぷり楽しめる東京近郊「超」小さな旅/ヤマケイ新書	632p/18cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
釈由美子／萩原浩司	釈由美子の山の常識110の疑問：教えて編集長!/ヤマケイ文庫	296p/15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
伊藤薫	八甲田山新たな真実：発見された「佐藤書簡」と「倉石手記」	408p/19cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈

VEU00522@nifty.ne.jp

◆第13回小島烏水祭（日本山岳会創立120周年記念山岳祭）

主催 日本山岳会本部、主管 四

国支部

期日 4月5日(土)～6日(日)

内容 5日 ①峰山公園で讃岐う

どんの接待（11時30分～12

時45分）②顕彰碑前で碑前

祭（13～15時）記念講演「小

島と岡野、交友は水のごと

く」講師岡野真さん（岡野

金次郎孫）③喜代美山荘

花樹海にて懇親会（17時30

分～20時）

6日 親睦登山 名勝・金

毘羅宮に参拝。昼食はうど

ん学校でうどん打ち体験、

自作うどんをいただく。

参加費 碑前祭は無料、懇親会費

は8000円。宿泊費やう

どん打ち体験などは別途。

予約 3月20日まで。

問合せ 小島烏水祭担当役員・田

所 ☎090・1009・

2705 ☒tado-h23@i2.

snob.jp

四国支部事務局・十河

☎090・8699・194

9 ☒ts0276@mc.pikara.ne.jp

◆石崎光瑠生誕140周年記念展

東京で初開催決定

「伊藤若冲を敬愛した、花鳥画の

求道者」と言われる石崎光瑠は、近

代京都画壇の日本画家として知ら

れていますが、実は本协会会员であ

り、明治42（1909）年、登山者

として初めて剣岳に登頂したパー

ティの一員でもあります。

本会報の昨年8月号でも既報の

とおり、光瑠の生誕140周年を

記念して大規模回顧展が故郷の富

山県南砺市をはじめ京都市、静岡

市で催されてきましたが、東京で

も開催されることが決定しました。

東京展は南砺市立福光美術館の

コレクションより、初期から晩年

までの代表作や資料など約40件を

公開し、光瑠の画業の全貌を紹介

する初の回顧展となります。

会期 4月23日(水)～5月6日(火)

会場 日本橋高島屋SC本館8階

ホール

時間 10:30～19:00（19:30閉

場）最終日は17:30まで

（18:00閉場）

主催 毎日新聞社／企画協力：南

砺市立福光美術館

問合せ 日本橋高島屋SC ☎03

・3211・4111

◆中村光吉（油彩・写真）展

会場 南アルプス市立美術館 市

民ギャラリー 山梨県南ア

ルプス市小笠原1281

☎0555・282・66

00

交通 JR甲府駅・山梨交通バス

ターミナルから同バス・市

立美術館下車1分、または

戸田町下車10分

期日 5月9日(金)～21日(水)9時30

分～17時（最終日14時まで）

12日(月)、19日(月)休館

入館 無料

作家住所 山梨県南都留郡富士河

口湖町河口1672 ☎0

90・5339・6238

訂正

＊会報2月（957）号19ページ、

緑爽会の講演会お知らせ中、10年

前の会報号数938、947号は

838、847号の誤りでした。

訂正してお詫びいたします。

（会報編集委員会）

◆編集後記◆

●北八ヶ岳で人気の黒百合ヒュッテのオーナー、米川正利さんが先月25日、亡くなられたので、通夜と葬儀に参列、最後のお別れをさせていただきました。自ら『ほろ酔い黒百合』という本を出されていますが、米川さんとの思い出は、全て酒付きです。前夜しこたま呑んだのに、翌日の朝食にも缶ビールが並び、その後の行動が、酩酊登山だったこともしばしばです。

●長男岳樹さんが喪主挨拶で述べられたように「山と酒を愛し、仲の良かった母と大好きな民芸品を探して世界中を旅した、満足のいく84年の生涯」だったと思います。

2017年、皇太子殿下だった天皇陛下を天狗岳にご案内した折に写されたという遺影が、そう語り掛けていました。（節田重節）

日本山岳会会報 山 958号

2025年（令和7年）3月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京 (03) 3261-4433
 FAX 東京 (03) 3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
 編集人 節田重節
 Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社